

Title	後漢の交趾刺史について：士變をめぐる諸勢力
Sub Title	The governor (Tzu-Shin 刺史) of province Chiao-Chih (交趾) in the later Han Dynasty, and Shi Hsieh (士變)
Author	尾崎, 康(Ozaki, Yasushi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1961
Jtitle	史学 Vol.33, No.3/4 (1961. 4) ,p.139(397)- 166(424)
JaLC DOI	
Abstract	<p>Wu Ti, the Emperor of Earlier Han, having conquered Nam Viet in the Second Century B. C., established a province, Pu (部), called Chiao-Chih (交趾), governed by the governor, Tsu-Shih (刺史), and this administrative organization was succeeded on to the Later Han Dynasty (25-220 A. D.). Towards the end of the latter dynasty, namely in 203 A. D., Chiao-Chih-Pu was raised to the rank of a state, Chou (州), called Chiao-Chou (交州), and accordingly, the governor, Tsu-Shih (刺史), was promoted to the viceroy, Mu (牧). Recently, the foregoing historical events have been well studied by several Japanese and Chinese scholars. The writer intends to clarify the events, still further in this article, through the comparison of texts found in Hou-Han-Shu (後漢書), Shan-Kuo-Chih (三国志), and many other books written in the Chin (晉) Dynasty (256 ~ 419 A. D.). Moreover, he tries to examine all governors of Province Chiao-Chih in the Later Han Dynasty. Towards the end of the Dynasty, the peace reigned only in the Delta of the Red River, and all other territories of China were troubled by discontented local lord. The reasons of the tranquility mainly come from the overestimated confidence of the central government on the abilities of Chu Fu (朱符) and Chang Chin (張津) as governors, and from the political power of the local, native lord, Shih Hsieh (士變), who actually ruled the province as Tai-Shu (太守) of Chiao-Chih-Chun (交趾郡). In conclusion, the writer reports in this article his research on the situation of Province Chiao-Chih at the end of the Later Han Dynasty, with special attention to political and social problems caused by the rivalry between the governors and the native lords whose representative was Shih Hsieh.</p>
Notes	史學科開設五十周年記念
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19610400-0139">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19610400-0139</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 後漢の交趾刺史について

——士變をめぐる諸勢力——

尾 崎 康

後漢が滅亡への争亂にあけくれているときに、はるか南の、かつて馬援が漢の極界とした交趾の地だけが、この禍からまぬかれていた。交趾太守の士變が、その強靱な土着勢力を率いて獨立王侯のような勢威を振り、かつ絶えず北方から脅かしてくる諸勢力とたくみに提携を策しつつ、その地の安泰を保つていたからである。このあいだの士變の動向については、三國志吳志卷四士變傳にくわしく、また、政治、社會、文化の面からいくたびか論ぜられてもいて、<sup>(1)</sup> あらためてくりかえすまでもない。さらに、ここには交趾、交州という行政上の名稱の問題があつて、顧頡剛、渡瀬正忠の兩氏の論攷を生んでもいる。<sup>(2)</sup>

したがつて、この稿は、これらの所論に據りながら、

後漢の交趾刺史について

なお些細な問題を殘す交趾刺史の面から、後漢の末期の交趾の情勢を述べるものであるが、士變をめぐる周圍の諸勢力の動向にも觸れることになろう。

### 註

(1) 山内晉卿・安南史上の一政權としての士變(史淵・一一・昭和一〇年)。

宮川尙志・三國の分立と交州の地位(東洋史研究・七一・三・昭和一七年)。

田村實造・漢代における廣東、佛印地方の開拓(東洋史研究・九一五、六・昭和二年)。

福井康順・牟子の研究(道教の基礎的研究・附録・昭和二年・理想社)。

蔣君章・士變對交州的貢獻——對越南政治文化最有貢獻的漢官(越南論叢・七章・民國四九年・中央文物供應社)。

(2) 顧頡剛・兩漢州制考(慶祝蔡元培先生六十五歲論文集・下冊・歷史語言研究所集刊外編・民國二十四年)。

渡瀬正忠・漢代に於ける交州なる呼稱の起源に就て(東洋學研究・一・昭和一八年)。

一

まず、敘述の都合上、前後漢代の制度上の交趾と交州

について觸れておこう。

後漢書の構成が、宋の范曄の本紀と列傳に、晉の司馬彪の續漢書から志が補われてできていることは、周知のとおりである。その卷一一三の都國志は、「交州」の條をたて、南海、蒼梧、鬱林、合浦、交趾、九眞、日南の七郡を列舉し、それぞれの城、戸、口を掲げたのち、

右、交州刺史、部郡七、縣五十六。

と書いている。しかし、本紀、列傳に、交州、とくに交州刺史という例はまづたくなく、すべて交趾、交趾刺史としてゐる。ここに、當時のこの地の行政上の名稱の問題があることになる。

まず、前漢にさかのぼつて、制度を示す必要な資料をあげてみよう。

①武帝元封五年（前一〇六）初置刺史部十三州。（漢書卷六武帝紀）

②至武帝、攘卻胡越、開地斥境、南置交趾、北置朔方之州。兼徐、梁、幽、并、夏周之制、改雍曰涼、收梁曰益。凡十三部、置刺史。（漢書卷二八地理志上）

③南海郡。…武帝元鼎六年開、屬交州。

鬱林郡。…莽曰鬱平、屬交州。

蒼梧郡。武帝元鼎六年開、莽曰新廣、屬交州。

交趾郡。武帝元鼎六年開、屬交州。

合浦郡。武帝元鼎六年開、莽曰桓合、屬交州。

九眞郡。武帝元鼎六年開、…。

日南郡。武帝元鼎六年開、…屬交州。

（漢書地理志下）

④孝武皇帝、南平百越、北攘戎狄、置交趾朔方之州、復徐梁之地、改雍曰涼、改梁曰益、凡十三州。所以交朔獨不稱州、明示帝王未必相襲、始開北方、遂交南方、爲孫基趾也。（應劭・漢官儀、太平御覽卷一五七州郡所引）

⑤漢既平南越之地、置交趾刺史、別於諸州、令持節治蒼梧。（胡廣・胡廣記、漢書地理志上顏師古注所引）

⑥成帝綏昭元年（前八）十二月 罷部刺史、更置牧、秩二千石。（漢書卷一〇成帝紀）

⑦哀帝建平二年（前五）四月 罷州牧、復刺史。（漢書卷一一哀帝紀）

⑧平帝元始四年（四） 十二州名、分界。郡國所屬、罷置更易、天下多事、吏不能紀。（漢書卷一二平帝紀）

⑨（元始五年）臣又聞、聖王序天文、定地理、因山川

民俗、以制州界。漢家地廣。二帝三王、凡十三州、州名及界、多不應經。堯典十有二州、後定爲九州。漢家廓地遼遠、州牧行部遠者三萬余里、不可爲九。謹以經義、正十二州名、分界、以應正始。（漢書卷九九王莽傳上）

⑩至（光武帝）建武元年（二五）、復置牧。（後漢書卷一光武帝紀下建武一八年章懷太子注）

⑪建武十一年（三六）是歲、省朔方牧、并并州。（後漢書光武帝紀下）

⑫建武十八年（四二）是歲、罷州牧、置刺史。（後漢書光武帝紀下）

⑬順帝永和九年（永和は六年まで、一三六―一四一）交趾太守周敞、求立爲州。朝議不許、即拜敞、爲交趾刺史。（晉書卷一五番地志下）

⑭（獻帝）建安二年（一九七）南陽張津爲刺史、交趾太守士燮表言、「伏見十二州、皆稱曰州、而交獨爲交趾刺史、何天恩不平乎。若普天之下、可爲十二州者、獨不可爲十三州。」詔報聽許、拜津交州牧、加以九錫、彤弓、彤矢。禮樂征伐、威表南夏、與中州方伯齊同、自津始也。（苗恭・交廣記、藝文類聚卷

#### 六州郡所引

⑮漢獻帝建安八年（二〇三）、改曰交州。（宋書卷三八州郡志）

⑯建安八年、張津爲刺史、士燮爲交趾太守、共表立爲州。乃拜津爲交州牧。（晉書地理志下）

⑰建安十八年（二二三）春正月庚寅、復禹貢九州。（後漢書卷九獻帝紀）

⑱建安十八年三月庚寅、省交州。（獻帝起居注、後漢書獻帝紀注所引）

顧頡剛氏は、この問題は、ただ名稱に關するもので、さして重要ではないとしつつ、だいたい以上の史料を利用してつぎのように結論された。<sup>(5)</sup>

武帝元封五年（前一〇六）の十三州設置のとき、交趾は交趾部であつた（①、②）。これは、後漢中葉の胡廣や、とくにその末年の應劭が明記していること（④、⑤）、誤りではない。漢末に、刺史は牧となつて、交趾牧が生まれ、さらに王莽の十二州の制で（⑧、⑨）、交州、および交州牧と變つた。揚雄の州箴に「交州箴」があるのは、そのためである。そして、後漢の光武帝は、漢の舊名に復して、交州を交趾としたはずだが、司馬彪の續

漢書の郡國志、百官志によると、それは改められないで、交州のままであつたらしい。漢時地理志下の各郡に、「屬交州」と班固が注したのは(③)、後漢初年の制度によつたものであり、司馬彪は、永和五年の圖籍によつて郡國志をつくつたのである。なお、建武十八年(四二)には、州牧が廢止されたから(⑫)、そのあと交州刺史が在任したことになる。後漢書に交趾刺史とあるのは、當時、その地、その官を「交趾」「交趾刺史」と呼んだのであつて、それが、後漢一代を通じて交州と稱さなかつたという證據にはならない。また、周敞と張津の建州の上表は(⑬、⑭、⑯)、帝紀にあらわれないし、内容にも矛盾するところが多くて、ときには傳説的でさえある。すなわち、武帝以來の交趾刺史部は、王莽のあと交州となつて、後漢の末葉にまでいたつた。しかし、これは中央政府と地方政府との文書の往來の名稱でしかないので、一般には、「交趾牧」と「交趾刺史」というのもしばしばみうけられる。と。

一方、渡瀬正忠氏は、扱われた史料はほぼおなじであつたが、つぎのように考えられた。前漢の武帝以來、後漢の中平年間(一八四―一八九)までは、嶺南の七郡は

交趾部と總稱された(①、②、④)。ただし、そのあいだにも、交州という俗稱が行われ、交州刺史と呼ばれることもあつたことであろう。そして、年代は確定できないが、宋書、晉書がいうように、後漢末の獻帝の時代、かつ張津が刺史のとき、正式に交州と改められたものである(⑮、⑯)。と。

この兩論を較べてみると、前漢代の制度についてはべつに異なることなく、交趾部に、交趾刺史、または交趾牧が在任していたのであるが、問題は、それが、王莽のときから交州に改められたか、それとも後漢の最末期に張津らの上表が容れられて昇格したか、にある。

王莽の交州説は、その十二州に、古文苑、藝文類聚以前の州名の提示がなく、また揚雄の交州箴しか用例のないところに、弱點がある。十二州とあるだけなら、武帝の十三州というのと差異はなく、交州箴は、その成立の時期が制度と一致しても、それだけでは後漢書などを退けるにはいたるまい。まして、それが後漢に踏襲されたとは、さらに考えがたい。

これにたいして、建安年間昇格説は、宋書、晉書、交廣記と、その成立が遅れ、年代の混亂もあるが、その形

式から見て明らかに意圖をもつたもので、比較的可能性があると考えられる。それは、「交趾」でつらぬく後漢書にしてもそうで、無意識でなされたものではあるまい。つまり、やや時代を隔てはするものの、この宋、梁、唐代にできた三書は、交趾と交州とを混同するような諸書とは異つて、それらを整理しようとする意圖を持つていたものであろう。

いまわたくしは、このような制度の問題を中心に述べるつもりはなく、仔細に検討することは怠るが、後節のために一應の見解を示しておくこととすべきである。

武帝が刺史部十三州を置いたとき、交趾は朔方とともに州としてはとりあつかわれなかつた。引きつづいて後漢でも、十二州と總稱されはしても、やはり交州ではなかつた。このあいだ、刺史についていえば、前漢末と後漢の初頭、刺史が牧に改められて、交趾牧が存在したことがある。しかし、范曄が、中平元年（一八四）のものの交趾についてなにも書かなかつた<sup>(8)</sup>、つまり後漢の交州のことに觸れていないのはてぬかりであつて、名目的にはさいごには交州が實在したのである。獻帝起居注の記事があるからである<sup>(18)</sup>。そこで、いつから州が設けら

れたかといえば、宋書、晉書の建安八年（二〇三）をとるのが妥當であらう。このとき同時に刺史が州牧に昇格したから、後漢には、交趾牧、交趾刺史、交州牧が存在したことになる。しかし、交州刺史というものはありえない。

以下の敘述はこの考えにもとづき、あるいはこれを裏づけることになるであらう。

#### 註

(3) 後漢書に、「交趾」の用例は、約七十を数える。交趾郡をさすのが大半であるが、交趾部の稱としても、交趾、交趾七都、交趾牧、交趾刺史というのがある。ただし、わずかな例外もある。荆交二州蠻夷賊（卷三〇上楊厚傳）は荆州と併稱し、おなじく州界（卷七一朱儁傳）は荆州との境界であるが、一州（卷二四馬援傳）、交州（卷七六衛琚傳）のごときである。

(4) 「交趾」と「交趾」については、陳荆和氏の所論を參酌して、引用文のほかは「交趾」を用いる。

陳荆和・交趾名稱考（國立臺灣大學文史哲學報・四・民國四一年）。

(5) 顧頡剛・前掲論文、とくにその一一交趾與交州の名稱問題。

(6) 揚雄の交州箴を、氏は平帝末年の作と考證されている。

(前掲論文・八八三～八八四頁)

(7) 後漢書の交趾に關する記載は、この年六月の交趾刺史賈琮の討平をもつておわる。

## 二

交趾と交州、とくに交趾刺史と交州刺史の問題を、ここでも三國志とその裴松之の注について調べたい。

三國志に、交州刺史はしばしばあらわれるけれども、後漢のものは、吳志士燮傳の朱符と張津の二例しかない。そして、三國志は、薛綜の報告文に武帝の交趾刺史という自明の一例を除いて、交趾刺史とはまったくいわない。つまり士燮のいる交趾を交州というほかには、交趾に觸れてこないのである。交趾、交趾刺史と扱う後漢書は、のちに述べるように、反亂の發生にさいしてごく斷片的、または一面的に交趾を對象とし、しかも、中平元年(一八四)の記事でおわつてゐた。すなわち、交趾についての後漢書と三國志との記述には、士燮以前の時代、士燮の時代と完全に時期的なずれがあるということである。このことを、とくに三國志について注意して考へたい。

いま述べたように、三國志に記載された後漢の交州刺史というのは、朱符と張津あるのみで、その所在は吳志士燮傳である。そして、三國志には、三國志及裴注綜合引得を一瞥すればわかるように三國以後の交州刺史がたくさん收録されている。士燮傳にみえる步騭や呂岱もそうである。そして、この時代の行政區劃では、この地はむろん交州、または交州と廣州であつた。そうすると、陳壽は、「交州」というのがその地の正式の名稱であつた三國の歴史を書いて、二例きりの後漢の交趾刺史をも、當該時代の交州刺史と同様に扱つてしまつたのではないかと推測されるであらう。

これは、つぎに述べる諸點から裏づけられると思う。まず第一に、士燮傳の記述の順序である。

冒頭に、六世の祖が王莽の亂を交州に避けたという。當時の地名は交趾であらうが、ここでは、吳志であり、士燮を吳の時代人として扱つてゐるから、基準とする地名についても、當然吳の交州をさしているのである。ついで、交州刺史朱符、交州刺史張津、と誤つたあとで、交州、と明記した後漢朝の璽書を掲げている。これが、張津の死亡のち、つまり交州になつてからのものなの

である。そして、建安十五年（二一〇）に、士燮は孫權に屈して、交州刺史步騭の節度を受けたというのである。

この順序を追うと、二人の交州刺史が、むしろ交州の刺史、つまり呉代に交州と呼んでいたこの地のかつての刺史、の意味であるかのようにも、解釋されるほどである。

ついで第二に、吳志卷六孫輔傳に、

（孫）策、立輔、爲廬陵太守、撫定屬城、分置長吏。遷平南將軍、假節領交州刺史。

とあることである。

孫策は、廬江、廬陵を平定し、建安四年（一九九）、いとこの孫輔を廬陵太守に任じ、さらに交州刺史を假節せしめて、西南方への進出を策しつつ、翌五年夏、不慮

の死をとげた。すなわち、步騭、呂岱につらなる呉の交州刺史がすでにこのときから設けられていることを知ると、この呉の官名が、おなじとき正式に交趾にあつた後漢の交趾刺史に、誤つて冠せられたように思われるのである。陳壽にしても、同時代の二人きりとの區別が、嚴密におこなえなかつたものであろう。

しかし、これは陳壽に限らないで、この時代の記録を通じて、その傾向があるようである。たとえば後漢書の志部、つまり西晉の司馬彪の手になる續漢書の、とくに郡國志、百官志がそうであり、また三國志の裴松之の注に引かれた諸書にも、窺えるのである。

これらは、比較する意味で、後漢、三國、晉代の諸書の、交趾、交趾刺史とするものもあわせて、一括して表示し、必要に応じて検討することにしよう。

書名	著者・成立年代	所在・出典	記事内容・用例
東觀漢紀	後漢・班固ほか 明帝代、靈帝熹平中 58～177ころ	卷11 鄧晨傳（後漢書15） 卷4 百官表（後漢書118） 百官志注？	（晨）祖父勳、交趾刺史……。晨、初娶光武姉元。王莽末……。交趾刺史、持節。



東觀書 (東觀記?)	(後漢代?)	後漢書 118 百官志注	交趾刺史、持節。
獻帝起居注	後漢・獻帝代 190 220	後漢書 118 百官志注	建安十八年三月庚寅……省交州。
(謝承) 後漢書	吳・謝承 3 世紀中期	謝氏後漢書補逸 卷 1 周敝傳 卷 3 陳茂傳 (太平御覽 194・263 など) 卷 3 周乘傳	交趾刺史周敝。 周乘、爲交趾刺史。
三國志	西晉・陳壽 3 世紀後期	蜀志 1 劉焉傳 吳志 4 士燮傳	(中平五年) 焉、內求交趾牧。 交州刺史朱符。 張津、爲交州刺史。
續漢書 (後漢書志部)	西晉・司馬彪 3 世紀後期	後漢書 102 天文志 " 113 郡國志 所 118 百官志	(延熹二年八月) 交趾刺史葛祗。 交州。交州刺史。
江表傳	西晉・虞溥 3 世紀後期	吳志 1 孫策傳注	昔南陽張津、爲交州刺史。
交廣二州春秋	西晉・王範 大康 8 年・298	後漢書 113 郡國志注 吳志 1 孫策傳注	交州、治羸樓。縣。 建安六年、張津、猶爲交州牧。
會稽典錄	東晉・虞預 4 世紀前期	吳志 12 虞翻傳注	交趾刺史基母俊。

華陽國志	東晉常璩 4世紀中期	卷2 漢中志	錫光、字長沖、爲交州刺史。
後漢紀	東晉・袁宏 4世紀中期	卷4 光武帝紀 卷15 孝殤帝紀 卷18 孝順帝紀 卷28 孝靈帝紀 卷29 孝獻帝紀	(建武四年冬十月) 交州牧鄧讓。 (元初中) 交州外塞。 (永和二年秋七月) 交趾刺史樊演。 (光初) 朱儁……爲交趾刺史。 (建安元年冬十月) 袁徽、避地至交州。

以上であつて、このあと南朝にはいつて、裴松之がみずからした蜀志卷八許靖傳の、張津爲交州刺史という三國志注があつて、范曄の後漢書につづき、宋書州郡志、晉書地理志、それに杜祐の通典(卷一八四)などが、建安八年の交州昇格説を唱えるのである。

このうち後漢代のもので、東觀漢紀は、東觀記として後漢書などに引かれているが、東觀書というのもこれとおなじであるか、いま確認できないので、ここでは例示するにとどめよう。獻帝起居注は、建安十八年の記録で、むしろ例外的である。三國時代には、交趾刺史とする謝承の後漢書しかないが、晉にくだと交州とするものも多く、續漢書、とくに後漢紀、ある面では三國志が兩者を混同していることに、注目すべきである。

これらを通觀して、三國志以下の行政上交州が現存し、交州刺史のおかれていた晉代の著者は、後漢代、または吳代の書と異つて、交趾から交州に轉じて複雑であり、しかも吳の交州に關連していた後漢末期の交趾とその刺史を扱つて、おなじく交州、交州刺史と誤認した傾向が知られるであらう。

#### 註

(8) 顧頡剛氏は、逆に、これを王莽の時代に交州が存在した例證とされる。

#### 三

後漢の初頭に交趾牧があつて、建武四、五年(二八、二九)ころ鄧讓が在任した。しかし、そののち一世紀は、交趾は後漢書の記述の對象とならず、牧、刺史の名もあ

らわれてこない。それが、後漢の政治力が衰えるとともに、刺史、太守など地方官の悪政が横行し、土民の反亂を呼んで、ようやく正史に記録されるのである。したがって、交趾刺史としてつぎに掲げる十數人が知られるのであるが、そのうち樊演と楊扶を除くと、みな征討の刺史である。後漢書は、末期の反亂のことに限って交趾を

扱っているにすぎないが、そこに士燮の抬頭する基盤があつた。反亂が士燮の誕生の年から記録されていることも、偶然ではあるまい。  
これらの刺史を表示するとつぎのごとくになるが、後漢書の記事が大半とはいへ、この表をみれば、このあいだに交州刺史があつたと考えるのは困難になろう。

交趾牧

在位年代	氏名	用 例	所 在	士燮年令
建武5年29	鄧 讓	交趾牧鄧讓 交趾牧鄧讓 交州牧鄧讓	後漢書1 光武帝紀上 " 17 岑彭傳 後漢紀4 光武帝紀	

交趾刺史

在位年代	氏名	用 例	所 在	士燮年令
永和2年137	樊 演	交趾刺史樊演 交趾刺史樊演	後漢書86 南蠻傳 後漢紀18 孝順帝紀	1
永和3年138	張 喬	交趾刺史張喬 張喬、爲交趾刺史。	後漢書6 順帝紀 " 86 南蠻傳 大越史記外紀全書3 南越志(太平寰宇記170所引)	2
永和中?	周 敞	永和元年：漢帝、以(周)敞爲刺史。 永和二年、周敞、爲交州刺史。 永和九年、拜(周)敞爲交趾刺史。	晉書15 地理志下	

光 和 元 年 4 181 178	光 和 4 年 181	熹 平 年 間 170 ころ	" 8 年 165	" 7 年 164	延 熹 5 年 162	延 熹 3 年 160	順 帝 ( 桓 帝 ころ 150 ころ	建 康 元 年 144
周 囑	朱 儁	丁 宮	葛 祗	張 磐	侯 輔	夏 方	楊 扶	夏 方
汝南陳茂、嘗爲交趾別駕……、 刺史周敞、欲到朱崖、儋耳。 交趾刺史夏方 交趾刺史九江夏方 (楊璇) 父扶、交趾刺史。 復拜夏方、爲交趾刺史。 長沙賊起、寇桂陽蒼梧。 ……太守甘定、刺史侯輔、各奔 出城。 長沙零陵賊五千人、入桂陽、蒼 梧、南海、交趾。交趾刺史及蒼 梧太守、望風逃奔。 交趾刺史張磐 交趾刺史葛祗 刺史丁宮 交趾刺史朱儁 即拜儁交趾刺史。 刺史朱儁 朱儁……交趾刺史。 牧守周囑 朱儁、救囑。	汝南陳茂、嘗爲交趾別駕……、 刺史周敞、欲到朱崖、儋耳。 交趾刺史夏方 交趾刺史九江夏方 (楊璇) 父扶、交趾刺史。 復拜夏方、爲交趾刺史。 長沙賊起、寇桂陽蒼梧。 ……太守甘定、刺史侯輔、各奔 出城。 長沙零陵賊五千人、入桂陽、蒼 梧、南海、交趾。交趾刺史及蒼 梧太守、望風逃奔。 交趾刺史張磐 交趾刺史葛祗 刺史丁宮 交趾刺史朱儁 即拜儁交趾刺史。 刺史朱儁 朱儁……交趾刺史。 牧守周囑 朱儁、救囑。	汝南陳茂、嘗爲交趾別駕……、 刺史周敞、欲到朱崖、儋耳。 交趾刺史夏方 交趾刺史九江夏方 (楊璇) 父扶、交趾刺史。 復拜夏方、爲交趾刺史。 長沙賊起、寇桂陽蒼梧。 ……太守甘定、刺史侯輔、各奔 出城。 長沙零陵賊五千人、入桂陽、蒼 梧、南海、交趾。交趾刺史及蒼 梧太守、望風逃奔。 交趾刺史張磐 交趾刺史葛祗 刺史丁宮 交趾刺史朱儁 即拜儁交趾刺史。 刺史朱儁 朱儁……交趾刺史。 牧守周囑 朱儁、救囑。	汝南陳茂、嘗爲交趾別駕……、 刺史周敞、欲到朱崖、儋耳。 交趾刺史夏方 交趾刺史九江夏方 (楊璇) 父扶、交趾刺史。 復拜夏方、爲交趾刺史。 長沙賊起、寇桂陽蒼梧。 ……太守甘定、刺史侯輔、各奔 出城。 長沙零陵賊五千人、入桂陽、蒼 梧、南海、交趾。交趾刺史及蒼 梧太守、望風逃奔。 交趾刺史張磐 交趾刺史葛祗 刺史丁宮 交趾刺史朱儁 即拜儁交趾刺史。 刺史朱儁 朱儁……交趾刺史。 牧守周囑 朱儁、救囑。	汝南陳茂、嘗爲交趾別駕……、 刺史周敞、欲到朱崖、儋耳。 交趾刺史夏方 交趾刺史九江夏方 (楊璇) 父扶、交趾刺史。 復拜夏方、爲交趾刺史。 長沙賊起、寇桂陽蒼梧。 ……太守甘定、刺史侯輔、各奔 出城。 長沙零陵賊五千人、入桂陽、蒼 梧、南海、交趾。交趾刺史及蒼 梧太守、望風逃奔。 交趾刺史張磐 交趾刺史葛祗 刺史丁宮 交趾刺史朱儁 即拜儁交趾刺史。 刺史朱儁 朱儁……交趾刺史。 牧守周囑 朱儁、救囑。	汝南陳茂、嘗爲交趾別駕……、 刺史周敞、欲到朱崖、儋耳。 交趾刺史夏方 交趾刺史九江夏方 (楊璇) 父扶、交趾刺史。 復拜夏方、爲交趾刺史。 長沙賊起、寇桂陽蒼梧。 ……太守甘定、刺史侯輔、各奔 出城。 長沙零陵賊五千人、入桂陽、蒼 梧、南海、交趾。交趾刺史及蒼 梧太守、望風逃奔。 交趾刺史張磐 交趾刺史葛祗 刺史丁宮 交趾刺史朱儁 即拜儁交趾刺史。 刺史朱儁 朱儁……交趾刺史。 牧守周囑 朱儁、救囑。	汝南陳茂、嘗爲交趾別駕……、 刺史周敞、欲到朱崖、儋耳。 交趾刺史夏方 交趾刺史九江夏方 (楊璇) 父扶、交趾刺史。 復拜夏方、爲交趾刺史。 長沙賊起、寇桂陽蒼梧。 ……太守甘定、刺史侯輔、各奔 出城。 長沙零陵賊五千人、入桂陽、蒼 梧、南海、交趾。交趾刺史及蒼 梧太守、望風逃奔。 交趾刺史張磐 交趾刺史葛祗 刺史丁宮 交趾刺史朱儁 即拜儁交趾刺史。 刺史朱儁 朱儁……交趾刺史。 牧守周囑 朱儁、救囑。	汝南陳茂、嘗爲交趾別駕……、 刺史周敞、欲到朱崖、儋耳。 交趾刺史夏方 交趾刺史九江夏方 (楊璇) 父扶、交趾刺史。 復拜夏方、爲交趾刺史。 長沙賊起、寇桂陽蒼梧。 ……太守甘定、刺史侯輔、各奔 出城。 長沙零陵賊五千人、入桂陽、蒼 梧、南海、交趾。交趾刺史及蒼 梧太守、望風逃奔。 交趾刺史張磐 交趾刺史葛祗 刺史丁宮 交趾刺史朱儁 即拜儁交趾刺史。 刺史朱儁 朱儁……交趾刺史。 牧守周囑 朱儁、救囑。	汝南陳茂、嘗爲交趾別駕……、 刺史周敞、欲到朱崖、儋耳。 交趾刺史夏方 交趾刺史九江夏方 (楊璇) 父扶、交趾刺史。 復拜夏方、爲交趾刺史。 長沙賊起、寇桂陽蒼梧。 ……太守甘定、刺史侯輔、各奔 出城。 長沙零陵賊五千人、入桂陽、蒼 梧、南海、交趾。交趾刺史及蒼 梧太守、望風逃奔。 交趾刺史張磐 交趾刺史葛祗 刺史丁宮 交趾刺史朱儁 即拜儁交趾刺史。 刺史朱儁 朱儁……交趾刺史。 牧守周囑 朱儁、救囑。
後漢書 8 靈帝紀 " 71 朱儁傳 " 86 南蠻傳 後漢紀 28 孝靈帝紀 大越史記外紀全書 3	後漢書 8 靈帝紀 " 71 朱儁傳 " 86 南蠻傳 後漢紀 28 孝靈帝紀 大越史記外紀全書 3	後漢書 8 靈帝紀 " 71 朱儁傳 " 86 南蠻傳 後漢紀 28 孝靈帝紀 大越史記外紀全書 3	後漢書 8 靈帝紀 " 71 朱儁傳 " 86 南蠻傳 後漢紀 28 孝靈帝紀 大越史記外紀全書 3	後漢書 8 靈帝紀 " 71 朱儁傳 " 86 南蠻傳 後漢紀 28 孝靈帝紀 大越史記外紀全書 3	後漢書 8 靈帝紀 " 71 朱儁傳 " 86 南蠻傳 後漢紀 28 孝靈帝紀 大越史記外紀全書 3	後漢書 8 靈帝紀 " 71 朱儁傳 " 86 南蠻傳 後漢紀 28 孝靈帝紀 大越史記外紀全書 3	後漢書 8 靈帝紀 " 71 朱儁傳 " 86 南蠻傳 後漢紀 28 孝靈帝紀 大越史記外紀全書 3	後漢書 8 靈帝紀 " 71 朱儁傳 " 86 南蠻傳 後漢紀 28 孝靈帝紀 大越史記外紀全書 3
45 42	45 42	45 42	45 42	45 42	45 42	45 42	45 42	45 42

〔中平元年 184〕	賈琮	州人屯兵執刺史周喁、殺之遣交趾刺史賈琮。舉琮、爲交趾刺史。	後漢書 8 靈帝紀 31 賈琮傳	48 50
〔中平 3 年 186〕	李進	使李進代之(賈琮)。李進我交州人	大越史記外紀全書 3	50
初平初(建安初 190 ころ) 196 ころ	朱符	交州刺史朱符刺史朱符	三國志吳志 4 士燮傳 薛綜傳	55 60 ころ
建安 5 前( 8 年 200 前) 203 ころ	張津	建安二年、南陽張津爲刺史。漢、遣張津爲交州刺史。次得南陽張津。昔南陽張津、爲交州刺史。張子雲、昔在京師、志匡王室。子雲、名津、南陽人、爲交州刺史。建安八年、張津爲刺史。	南越志(藝文類聚 6 州郡所引) 三國志吳志 4 士燮傳 薛綜傳 孫策傳注 所引江表傳 蜀志 8 許靖傳 裴注 晉書 15 地理志下	65 前( 67

交州牧

建安 8 年( 10 ころ 203 ) 205 ころ	張津	(建安八年…)乃拜津爲交州牧。建安六年、張津猶爲交州牧。	晉書 15 地理志 下 三國志吳志 1 孫策傳注 所引交廣二州春秋	67 69 ころ
----------------------------	----	------------------------------	-----------------------------------	-------------

そのほか

鄧勳

(鄧)晨父勳、交趾刺史。

後漢書15 鄧晨傳注所引東觀記

錫光

錫光、字長冲、爲交州刺史。

華陽國志2 南中志

周乘

周乘爲交趾刺史。

謝承後漢書(補逸)3

綦母俊

交趾刺史綦母俊

三國志吳志12 虞翻傳注所引會稽典錄

〔一〕は、實在は疑わしいが、敘述上必要なため含めたもの。

七十年ほどのあいだにこれだけの人数は、決して少ないが、ほとんどが征討の刺史であるから、そのひとりひとりについて、反亂を招いた悪吏が、前任者としていたわけで、後漢の交趾刺史はさらに相當な人数にのぼつたであろう、と想像される。反亂が頻繁なのは、むろん苛斂誅求によるものであり、後漢書賈琮傳が、つぎのように傳えているのも、周知のとおりである。

舊交趾、土多珍產、明璣、翠羽、犀象、瑇瑁、異香、

美木之屬、莫不自出。前後刺史、率多無清行、上承

權貴、下積私賂、財計盈給、輒復求見遷代。故吏民

怨叛。

後漢の交趾刺史について

常任の刺史のこのような態度は、門閥貴族の官界との進出と關係がある<sup>9)</sup>。その恰好な贈賄品の負擔が、はげしく土民に被せられたのであつた。具體的な例は乏しく、すこしくずれるところもあるけれども、後漢書からつぎのような事實が知られる。

たとえば、明帝の即位のころ(永平元年・五八)、尙書の鐘離意は、交趾太守張恢の收奪と贈賄とを摘發したし(卷四一鐘離意傳)、折國は鬱林太守となつて、貨財三億、家僮三百人を有したという(卷八三方術折像傳)。

また孟嘗は、合浦太守として赴任してみると、前任の太守たちの貧穢なこと限りなく、特産の明珠などが絶滅し、

貧者が道に餓死していたと傳えている(卷七六孟管傳)。

このように、刺史は、私腹をこやして目的を果すと歸任し、反亂を招いて征討の刺史を求め、しかも、鎮壓を果した名將や、尉撫に盡した能吏も、中史政界の要請にまもなく引きあげねばならず、その任期が非常に短かったことが知れる。混亂をきわめる中央の政状は、邊境の對策としてただ反亂と鎮壓の惡循環をみおくる、つまり治政より鎮壓であり、能吏より將軍という常に臨時の處置をくりかえすほかに術がなかつた。したがって、刺史の人選に苦慮し(南蠻傳永和三年)、その地位も、鎮壓の功績によつて、夏方が交趾刺史から荊州の桂陽太守に(後漢書卷八六南蠻傳)、おなじく張磐が清白をもつて稱せられて盧江太守に(後漢書卷三八度尚傳)、それぞれ榮轉するというものであつた。

さて、列舉した刺史については、士燮の發展の過程と關連して、一瞥しておくのが妥當であらう。

永和二年(一三七)の區憐らの亂は、南蠻傳に記録されていくさんの反亂のなかでも、もつとも後漢政府を苦慮させたものである。樊演、引きつづいて張喬の卒いる數萬の軍に一年余も對抗したのであるが、士燮はこ

の年、王莽の亂以來、六世にわたつて土着した漢族に生まれている。

たまたま、この永和年間(一三六―一四一)には、周敞によつて、交州への昇格運動が行われて、果さなかつたという(晉書卷一五地理志下)。この晉書地理志の記事には、紀年の誤りがあつて、いささか信じがたいが、周敞は、交趾刺史として實在の人物であるから、一方的に退けることはあたらず、ここでは、交趾には建州の氣運がかねてからあつたことを知るべきであらう。

揚扶についてはなにもわからないが、夏方の二度にわたつた鎮壓のあいだ、すなわち桓帝のとき(建和元年―永康元年・一四六―一六七)には、士燮の父の賜が土着の漢人豪族として日南太守に任命されている。このころ士燮も京師に遊學して劉子奇に師事し、孝廉から郎官へのコースを歩みはじめていたであらう。南蠻傳にみるかぎりでは、交趾のもつとも平隱な一時期であつたようである。

士燮は、桓帝の末年には、三十一才になつてゐる。服喪ののち、茂才にあげられて、ふたたび官途につき、交趾太守にいたる期間をみこむと、士賜の死去と士燮の歸

郷とは、この年をさほど隔ててはいはしまいと考えられる。このころから士燮は、郷里で直接、刺史と接觸することになる。

その密接なことが想像されるのが、丁宮とのあいだである。丁宮は、亂世の交趾刺史としては、もつとも大物であつて、司空、司徒にのぼつた（後漢書卷八靈帝紀<sup>10</sup>）。そして、弟の士壹を辟召している。有能な刺史との提携は、士氏の繁榮に力となつたことであらう。

光和四年（一八二）、交趾刺史朱儁の征討は、元年以來の交趾、烏潯の蠻の反亂に、南海太守孔芝らが参加したためである（後漢書卷百一朱儁傳）。引きつづいて中平元年（一八四）に、交趾の屯兵を卒いて刺史に反抗し、賈琮の鎮壓を受けたのは、合浦太守來達である（後漢書卷八靈帝紀、卷三十一賈琮傳）。

このような反亂の指導者をみると、さきに交趾太守張恢、鬱林太守折國の例をあげた場合と異つて、太守が士民とおなじ利害關係から、刺史に反抗していることがわかる。この方面の太守は、もともと江南、あるいは巴蜀の地方から、多く派遣されてきていた<sup>11</sup>。しかし、亂世と人材の不足、そして反亂の性質とから、おそらくは漢人

であろうが、地元と密接な關係をもつものがしだいに委任されるようになり、しかもかれらが、土民のひろい支援を受けて、自立しようとする氣運をたかめていた、と推測させるところである<sup>12</sup>。

士燮の交趾太守就任も、これと一連のものであらう。その時期は賈琮のころとみて、ほぼさしつかえあるまい<sup>13</sup>。

周喁、李進の名を交趾刺史としてあげるのは大越史記外紀全書であつて、百粵先賢志などから引いたとするが、これは信ずるにたらない<sup>14</sup>。ただ、李進を、我交州人、とするのは、郷土意識とか民族主義意識とかいうものの旺盛であつても、いま述べたように、また、賈琮が現地で良吏を簡選したというように、當時のそのような風潮を示すものでもあらう。

このあと、刺史に朱符、張津の存在が確認できる。このふたりだけが、交趾太守としての士燮のうえにあつたごとくであり、ともに非業の死をとげた。朱符の刺史就任はおそくとも初平年間（一七〇―一七四）をくだるまいと思われ、その横死、張津の就任は、建安初年（一九六―）ごろと推定されるが、そのあいだに士燮は、ふた



りはもちろん、趙佗とて及ばなかつたというほどの勢力を掌握しているのである。この問題については、節をあらためて述べよう。

このような刺史に、士燮は、その能、無能に應じて、服従―提携と無視との二様の態度をとりつつ、土民の絶對的な支持をえていたことであろう。<sup>(15)</sup> 朱符、張津の横死は、いうまでもなく部民をリードする太守の實力に、刺史の統禦が及ばなかつた結果にほかならない。

註

(9) 宮川尚志・前掲前論文・二八頁。

(10) 丁宮の傳はないが、後漢書靈帝紀によると、その司空就任は中平四年(一八七)五月で、司徒には翌年七月になり、六年七月に辭職している。交趾刺史から三公にのぼる期間を考慮すると、丁宮の交趾在任は、熹平年間(一七二―一七七)ごろとなろう。安南志略卷一〇のいうように、桓帝の代までは遡るまい。

(11) 後漢室には、光武帝の曾祖父に鬱林太守劉外(後漢書卷一光武帝紀)、一族に蒼梧太守劉利(後漢書卷一一劉玄傳注引帝王紀)がいて交趾と關係が深かつた。後漢代の太守の出身は、知るかぎりではつぎのように表示できる。

(年代)	(太守氏名)	(出身地)	(所 在)
1世紀	合浦太守費貽	犍爲	後漢書 <sup>81</sup> 譙玄傳 (獨行)
"	南海太守孔嵩	南陽	" 范式傳
"	日南太守李善	南陽潯陽	" 李善傳
2世紀	合浦太守孟嘗	會稽上虞	" 孟嘗傳
"	蒼梧太守雷義	豫章鄱陽	" 雷義傳
"	南海太守吳恢	陳留長垣	" 64 吳祐傳
"	蒼梧太守劉曜	零陵烝陽	" 蜀志 <sup>8</sup> 劉巴傳注 零陵先賢傳
"	蒼梧太守陳稚叔	定陵	三國志 <sup>13</sup> 鍾繇傳注 魏志 <sup>13</sup> 先賢行狀
"	日南太守虞歆	會稽餘姚	三國志 <sup>12</sup> 虞翻傳注 吳志 <sup>12</sup> 翻別傳

(12) 田村實造氏も、反亂にみられる在野の居留漢人の態度を指摘されている(前掲論文・29頁)。

(13) 士燮の動向を伝えるものは吳志士燮傳をおいてないが、ここには交趾太守就任の時期が明らかにされていない。ただ、

燮、在部四十餘歲、黃武五年、年九十、卒。

とあり、全體の記事の内容から、また士燮の年令、周圍の狀勢から推すと、この在郡というのは交趾太守として交趾

郡にあつたことを指し、それが四十余年の意であるように考えられる。そこで、四十余年を黃武元年（魏、黃初七年・二二六）から逆算すると、光和元年（一七八）から、中平四年（一八七）のあいだ、となる。合浦、交趾、烏滸の亂がおき（光和元年正月）、朱儁の平定を受け（光和四年）、ふたたび抗爭がおきて、賈琮の鎮壓と統治（中平元年（三年）をも受けるまでのあいだのことである。大越史記外紀全書のたてる、士紀元年Ⅱ中平四年説は、あえて餘歲を切りすて、士王の權威にさわりのないよう、その翌年にもつてきただけのものと思われるが、その理由は一應諒承できよう。光和、中平年間の反亂の地域、性格からいつて、公算としては、當時、士燮は野にあり、そのご土民の利害を守つた賈琮の政策に應じたというほうが大である。

(14) 李進の名は、大越史記外紀全書、越史通鑑綱目、越史略、安南史略などが掲げ、とくに越史通鑑綱目は、百粵先賢志から引いたとするが、大越史記外紀全書の収載する李進の建安五年の上奏文など不合理なところが多い。なお明の歐大任の編んだ百越先賢志の卷二は、後漢書南蠻傳の永和二年にみえる武陵太守李進に附會せしめている。

(15) 前者の例は丁宮に對するもの、後者としてはそのころの士燮の勢力と、朱儁、賈琮の平定を受けるにいたる一連の反亂にあつて、士氏の名が、もとよりその一味としても、また前任刺史の協力者としてもいつこうにあらわれてこな

後漢の交趾刺史について

いことに、想像されるところ。この態度は、つぎの朱符と張津とに對しても充分に窺われる。

#### 四

交趾刺史朱符が夷賊に殺され、州郡が擾亂した（三國志吳志士燮傳）というのは、士燮の動向と大いに關係があらう。士燮がただちに三弟を太守とし、治安を回復して、事實上、刺史の任を繼承したこの一連の行動は、積極的に朱氏の勢力の驅逐に成功したことであると考えられるからである。

朱符は、福井博士の指摘によると、豫章太守朱皓の兄にあたるという。<sup>(16)</sup>すると、朱儁の子である。

朱儁は、光和四年（一八一）の交趾刺史ののち、皇甫崇と黃巾の亂の平定に活躍し、大尉、錄尚書事から興平元年（一九四）秋、大司農にのぼり（朱儁傳）、翌年四月、死んだ（後漢紀卷二九）。家兵五千人を調發し、旬日にして交趾の賊を定めたこの會稽上虞の出身の名將、朱氏が、さらに増強された兵力を擁し、嶺北の地に相當な勢威をえていたであらうことは、想像にかたくない。當時この勢力のために、孫氏はまだ抬頭の機をえられな

つた。<sup>(17)</sup> 朱符の交趾刺史もおそらくこのころ、すなわち初平年間(一九四―一九四)<sup>(18)</sup>のことで、豫章太守に弟の朱皓あり、朱氏の勢力がふたたび嚴南にも及んだのである。

孫策が、淮南の袁術に従い、江を渡つて江東の平定を策したのは、朱儁の死去の年である。そして、豫章太守に朱皓を擁する揚州刺史劉繇を、彭澤に追つた。そのあおりをくつて、朱皓も殺されている。<sup>(19)</sup> 孫策は、建安二年(一九七)には袁術と絶ち、曹操に吳侯に封ぜられて、江南にその威を確立した。

このように、朱儁の死去と孫策の進出とは密接につながつてい、孫策の壓迫を受けて、朱氏は、本據で急激に後退する。交趾のがわでも、士燮が大いに發展してきていた。當時、交趾にあつた薛綜が、のちに、

刺史會稽朱符、多以鄉人虞褒、劉彥之徒、分作長吏、侵虐百姓、彊賦於民、黃魚一枚、收稻一斛、百姓怨叛、山賊並出、攻州突郡、符走入海(三國志吳志卷八薛綜傳)。

と報告しているのが朱符の死にいたる實狀であるが、これもそのような狀勢から判斷して、建安元年(一九六)

をさほどでるものではあるまいし、<sup>(20)</sup> また、そこには士燮の暗躍もあつたことであろう。そして、士燮は獨立王侯ほどの權力を握るのである。

したがつて、刺史朱符の死は、苛斂誅求に對する土民の反抗だけとはかならずしも限らないで、多分に政治的な原因も推察できる。このころ、多數の士人の交趾への避難が、すでに父子の生存中から開始されているが、<sup>(21)</sup> これにも、名將朱儁の子、有才と稱せられる朱皓の兄である交趾刺史朱符を頼るということが、當時は土豪としか知られていない士燮以上に保障となつたことに、注目すべきである。避難民にとつては、まもなく朱氏が滅び、士燮の厚い庇護がえられたことは、予想外のことであつたと思われ<sup>(22)</sup>る。

一方、朱符は、現地で朱皓とともに干吉、牟子を好遇し、當時、土民のあいだにかなりの信仰をえていたらしい佛教に、關心を寄せていた<sup>(23)</sup>ことも、みのがしてはならない。

朱氏が一掃された結果、士燮は一舉に勢威を振いえた。このありさまは、士燮傳にくりかえし述べられてい<sup>(24)</sup>るとおりであり、大越史記外紀全書が士紀をたてるのに

ふさわしいものであつた。もつともこのときは、士紀では、すでに十年をも數えている。

しかし、士氏四兄弟の郡太守が交趾、合浦、九眞、南海であつて、士氏の勢力範圍が合浦以南であつたことを示している。この勢力圏は、光和、中平のころにも反亂の發生をみなかつたし、また、のちに劉表の進出によつて賴恭の赴任を許容したとき、ここまでは立ちいらせなかつたという範圍なのである。ここで士燮は、避難の中國士人に對しては漢室に忠節な儒者であり、土民には土俗に徹し、佛教徒の色彩の濃い王であつた。かつて刺史に對し、のちに孫權に對すると同様の、士燮が常に用いて變轉して及ぼす諸勢力に對處するその術策である。

朱符を繼いだのが、張津である。いま述べたように、朱符は建安初年に死んだから、張津の着任は、建安六年より遡るであらう。

それを裏づけるためにここにとりあげるのは、先に表にあげた三國志裴注の引く江表傳と交廣二州春秋である。この二つは、關連して考えられよう。ともに、吳志孫策傳にされた注である。

まず道士千吉の行迹が述べられ、孫策は、これを嫌つ

後漢の交趾刺史について

て、江表傳によると、

策曰。昔南陽張津、爲交州刺史。舍前聖典訓、廢漢家法律。常著絳帕頭、鼓琴燒香、讀邪俗道書、云以助化、卒爲南夷所殺。

と脅迫したという。裴松之は、しかし、この年代について異議をとнаえ、さらに志林を引いて、

志林曰。……（虞）喜、推考桓王之薨、建安五年四月四日。是時、曹、袁相攻、未有勝負。案、夏侯元讓與石威則書、袁紹破後也。書授孫賁以長沙、業張津以零桂。此爲桓王於前死亡、張津於後死、不得相讓、譬言津之死意矣。

と書いたあとで、

臣松之案。太康八年、廣州大中正王範、上交廣二州春秋、建安六年、張津猶爲交州牧。江表傳之虛、如志林所云。

と斷じているのである。

これによると、裴松之が指摘するように、明らかに前後の錯綜はあるが、すくなくとも孫策が交趾刺史張津を知つていて、張津と交趾とに關心を寄せていることがわかり、邪俗の道教にこる張津があえなく殺されたという

のは志林がたとえていつたのだと指摘するように、どうも征服の野心を示しているらしいのである。南下を續ける孫策は、建安四年（一九九）以後に、交州刺史を設けて、孫輔に假節せしめた。そしてその志林にあるとおり、建安五年四月四日に死んでいる。そうすると張津の刺史は、建安五年夏以前という線が明らかにでてくるのである。

孫策の交趾への野心は、このようにつとに抱かれていたものであろうが、當時、まだ會稽、吳郡、丹陽、豫章、廣陵の五郡を有するだけで、とうてい實現の段階ではなかつた。そして果すべくもないままに、建安五年に暴死したのであり、孫權が代つてついにこの地を収めるのは、さらに十年のちになるのである。

交廣二州春秋については、裴松之はその成立年代を強調しているが、この

建安六年、張津、猶、爲交州牧。

は、そのまま容認するわけにはいかない。

すなわち、この「猶」の用法で、ふたつのことが考えられる。ひとつは、張津が建安六年以前から交趾にいたことであるが、もうひとつは、これが交廣二州春秋の原

文そのままではないことである。裴松之は、この書から建安六年の張津の記事をみつけて、こう主張したにちがいない。したがつて、ここでは張津の存在（生存が主題なのであつて、刺史と牧のほうはとりちがえることもありえよう。現に裴松之は、蜀志許靖傳に交州刺史と注していた。交趾刺史から交州牧に留任した張津について、ただこの地の地方長官という意味で、二様の官名を冠したものだと思われる。いいかえれば、

1. 建安六年、張津は交趾に刺史であつた（交州刺史と誤記されていたかもしれない）。

2. 張津は、—建安八年以後—交州牧であつた。

というふたつの記事が結びついて、裴注になつたと推定するのである。

いずれにせよ、裴松之の指摘は、孫策と張津の死亡の時期をめぐつて江表傳の誤りを衝いているのであるが、交趾刺史については無關心であつたことが知れるのである。そしてこのあと宋書あたりから、この問題を重視する傾向があらわれはじめたようである。

孫權よりもまず、劉表が、ほぼ時をおなじくして交趾への進出を圖つてきた。張津は、この勢力に對處して立

場を失うのである。

荊州牧劉表が揚州の豫章に觸手を伸ばしたのは、興平年間（一九五―一九六）のことであつた。それは、劉繇、引きつづいて孫策に拒まれたが、方向は長沙、零陵から交趾へと轉ぜられる。しかし、實際に交趾に及んだのは、つぎの事情によるように、ややおくれて建安五年にくだるであらう。

長沙太守張羨は、不遇ということで州牧の劉表を恨み、郡人の恒階に説かれて、建安三年、勢力下の長沙、零陵、桂陽の三郡をあげて、遠く曹操と結び、はげしく抵抗した（資治通鑑卷六十二獻帝建安三年）。劉表はこれを攻めたが、連年くならず、五年になつて張羨の病歿に乘じ、ようやく平定した。この結果は、劉表傳に

於是、開上遂廣、南接五嶺、地方數千里、帶甲千余萬、……萬里肅清、大小威悅、而服之（後漢書卷一〇四）。

とある。交趾への進出は、これをあしがりとして、まもなく開始されるのである。<sup>(24)</sup>

一方、張津が劉表と對戦したことは、のちに引く吳志薛綜傳に明らかである。したがつて、これも建安五年以

後漢の交趾刺史について

前という線を引くことになるう。

ついで、州牧の制について觸れよう。<sup>(25)</sup>

中平五年（一八八）六月、後漢は、その衰勢を建てなおすために、重要な數州に牧伯をおいて、これに清名の重臣を起用することになつた。劉焉の建議にもとづくもので、その益州牧をはじめ、幽州牧劉虞、豫州牧黃琬、それに交趾から歸任したばかりの冀州牧賈琮が誕生し、遅れて初平三年（一九二）十月、劉表も荊州牧となつた。

このとき交趾は、むろんそのなかに含まれず、州牧はおかれなかつた。しかしこの提案をした劉焉じしんは焉、内求交趾牧、欲避世難（蜀志劉焉傳）。

といわれるから、中央では、交趾牧というのも、候補か、せめて話題にはのぼつたことであらう。そして刺史張津は、袁紹の親客と伝えられ（三國志魏志卷六袁紹傳裴注所引續漢書）、何進、何太后の兄妹の宦官の誅滅は、張進の勸告によるというから、當時、朝廷にあつたようであるいはこの議に參畫していたかもしれない。

ところが、この制は、予想に反して、州任の重きことこれよりして始り（後漢書劉焉傳）、地方分裂の傾向に拍車をかけることになつた。十年を経過して、建安三年

(一九八)ともなると、これらの群雄は、まったく轄據の様相を示し、避難が交趾に行われたように、むしろ交趾こそ、志は王室を匡う(三國志蜀志卷八許靖傳)という刺史張津と太守士燮のもとに、貴重な漢土としての存在を示している。交州への昇格の上奏がなされ、認められる条件にあるとみていいであろう。

そこでこの時期であるが、宋書州郡志、晉書地理志の建安八年は、交廣二州春秋が、まさに述べたように解釋されるのであるから、しいて動かす必要はない。建安八年八月には交趾を脅していた劉表に、獻帝を擁する曹操が攻撃を開始しているから、これに呼應しての處置とも想像できるであろう。

すなわち、劉表の勢力に直面して、刺史張津は、武力でこれに對處する一方、流寓の士人を通じて曹操への働きかけが行われた。袁徽——荀彧——曹操(士燮傳)、許靖——曹操(許靖傳)の線を辿り、かれらの道中の體驗にもとづいて援助が要請されている。曹操は、ようやく主導權を握ろうとしていたが、なお袁紹と對戰していたから、曹操と劉焉の關係を頼つて、益州收劉璋との提携が畫策された。

この成果は結局えられず、劉表の侵入を許すことになったが、のちに許靖、劉巴、許慈たちの入蜀の契機が、劉璋とのあいだにも、また張津、士燮に對しても、このとき生じたといえるであろう。そして曹操は、八年八月になつてようやく劉表に兵を向けるのである。

張津は、すくなくともこの年までは、劉表に抵抗したとみられる。許靖が曹操に報告したように、東歐、閩越の國をへて、萬里を行つても漢地のみられないときに、隔絶された交趾だけがよく後漢の領土たりえた。張津は交趾刺史、交州牧として數年——五、六年も在任したと思われるが、多分に佛教的な性格をもつた行動をとり、劉表の脅威にさらされて軍事に苦慮し、結局、部下の區景に殺された。これは、劉表による蒼梧太守吳巨の派遣が、賴恭と同時、すなわち張津の死亡とともに建安八年に行われたかと思われるふしがあるから、交州牧となつてもなくのことと推定される。この期間は士燮の全盛時代であるが、士燮との勢力關係の問題が軍事面において窺いにくく、また士燮の武力の程度についても、具體的に劉表と抗した事實がえられない。しかし、張津の死に乗じて劉表は、賴恭を刺史とし、蒼梧太守史璜の後任に吳

巨を任命した（士燮傳）が、士燮傳によつても薛綜傳によつても、ふたりは明らかに赴任してきていることがわかるから、すくなくとも北部は劉表に陥れられたのである。後漢政府は、士燮に璽書して、綏南中部將を授け、劉表を逆賊と呼んで、ひたすら士燮に依存し、士燮またこれに忠節を盡くすかのように、あえて朝貢を行つてゐるが、七郡の董督ということは實際にありえなかつたわけである。頼恭はまもなく失脚するけれども、吳巨は建安十五年、步騭の來州までこの地方で暗躍している。士燮として許靖、劉巴や、貢使張旻の見聞を通じて、漢土の狀勢を熟知しながら、あくまで劉表と對戦したかは疑問である。

なお張津の後任は、士燮への璽書の内容からみて、實在しないものと思われる。

建安十三年八月、劉表が死去し、孫權が、吳巨と提携を策したらしい劉備（資治通鑑卷六十五獻帝建安十三年十月）と手を握りつつ、赤壁の戦を勝ちとつたので、交州に波及するのは、孫權の勢力と代つた。十五年の交州刺史步騭の派遣である。

士燮は、この狀勢を判斷して積極的に孫權に従つた

が、この経過と、このあいだ、およびこののちの事情は、士燮傳に述べられ、宮川尙志氏の所論にくわしい。<sup>(26)</sup>この結果、後漢の交州は實質的に消滅した。十八年正月には、禹貢の九州に復するということで、交州は整理され、名目上にも存在をみなくなつたのである。

註

(16) 前掲書・九九頁。

(17) 孫策の父の孫堅は、中平三年（一八六）黃巾の亂に對して、中郎將朱儁のもとで佐軍司馬であつた（三國志吳志卷一孫堅傳）。孫氏の抬頭は、實にこのときの功績によるといつていい。

(18) 萬斯同は、三國漢季方鎮年表（二十五史補篇第二冊所收）に、朱符の交趾刺史を、中平六年（一八九）から興平二年（一九五）までとしている。この一連の朱符の動向を眺めると、いささか性急ではあるが、かなり當をえた見解といえるであらう。

(17) 資治通鑑は、この一連の記事を興平二年（一九五）にかけている（卷六一後漢紀）。朱儁の死去とおなじ年である。しかし、三國志の吳志卷四劉繇傳、蜀志卷五諸葛亮傳に引かれた獻帝春秋によると、つぎのような事情が知られる。豫章太守周術が死んだので、荊州牧劉表は、諸葛亮の従父の諸葛玄を、のちに交趾刺史に頼恭を遣わしたのとおな



じように、豫章太守に送つた。しかし後漢朝は、これを認めないで、朱皓を後任とした。そこで朱皓は、刺史劉繇の援助を受けて、南昌にいた諸葛玄を攻めた。諸葛玄は、西城に退き、建安二年（一九七）正月、城民に殺されたが、朱皓も、それにさきだつて、劉繇の派遣してきた援將の笮融に陥れられてしまった。その年代は、資治通鑑が、孫策の事蹟に關連して諸葛玄の死の三年まえに記しているのは、繰りあがつているので、實際は明けて建安元年（一九六）にはいつてからになるう。

(20) さきに述べた萬斯同の興平二年説は、この意を汲んでいるのであろうか。

安南志略のいう建安五年朱符刺史説（卷七漢交州九眞日南刺史太守）は、建安六年張津なお交州牧たり、にかけただけのことで、根據はあるまい。

(21) 避難の契機は、中平六年（一八九）の董卓の亂にあり、桓曄、許靖などは初平中（一九〇）―一九三、會稽―交趾のコースをとつている。この問題は、刺史から離れるが、のちに詳述しておきたい。

(22) 士燮傳にみえる袁徽の荀彧への報告は、それを示しているとみられよう。

(23) 福井博士・前掲書。

(24) 張羨が、劉表に反して曹操についたとき、曹操は、袁紹と對戰中で張羨を救えなかつた。袁紹は建安五年中には

ば敗れたので、曹操は、ただちに劉表を討とうとしたが、時機尚早と荀彧にとどめられ、六年春、劉備を汝南に攻めて劉表のもとに奔らせたと、劉表との對戰は八年八月まで果せなかつた。しながつて、劉表にとつてはこのあいだ南進する機會をえていたのである。

(25) 狩野直禎・蜀漢國前史（東方學・一六・昭和三年）。

(26) 前掲、三國の分立と交州の地位。

## 五

この稿の主題と直接の關係はないが、關連する問題をここでとりあげておこう。交趾に避難してきた中國の士人についてである。

士燮のもとに避難してきた中國の士人は、百をもつて數えられ、士燮は、このひとたちに謙虛に接し、厚く待遇し、學問の振興に力あつた、という（士燮傳）。

避難の契機は、靈帝の死去のあと少帝を廢して獻帝を擁立した董卓の亂（中平六年・一八九）である。士壹も、亂の發生によつて歸郷している。ときに、丁宮が司徒をやめたばかりで、その信任から士壹に同行した避難民も、すでにいたことであろう。

桓曄や許靖もおなじころ都を落ちたが、しかし、はる

か交趾に直行はしていない。桓曄は、初平中（一九〇）（一九三）、まず會稽に逃れ、それから海路、交趾に達した（後漢書卷三七桓榮傳附桓曄傳）。當初は會稽太守王朗たちを頼り、孫策の渡江にやむなく交趾に落ちのびた許靖（許靖傳）と、おなじような行動であろう。許靖の交趾到着は、艱難辛苦のすえ建安初年（一九六）に果されたようであるが、桓曄はやはり初平中とみるべきである。

袁徽も、建安以前に交趾に着いているらしい（袁宏後漢紀卷二九建安元年十月）。薛綜も、朱符の死を臣の所見としている（薛綜傳）から、これもほぼおなじである。

すなわち、初平と興兵年間には、すでに續々と交趾への亡命が行われていたのである。ところで、桓曄、許靖が、はじめからは交趾をめざさなかつたように、このあまりに遠く、航行の困難な地への避難は、相當な決斷と安全の保證を必要とした。それには、この年代を考えると、丁宮たちを通じた士氏の盛名以上に、會稽を経て、當時なお存命の朱儁、朱符、朱皓の名聲が大いに信賴されたのではないであろうか。士燮の名がたかまつたのは、むしろそののちのこと、つまり、朱氏が没落し、貯えられてきた士燮の土着勢力が、第一線に確立され、避難民

を保護し、學術を獎勵して、そこから認識をえられたのである。

そのほかに、劉熙、程秉、許慈、劉巴<sup>(27)</sup>たちが交趾に來つた。このなかでは、もつともおそいとみられるのが劉巴で、烏林の役ののち、すなわち、建安十三年から十四年にかけてのころである。

この士人たちが、孟子注七卷、大戴禮記注十三卷、諡法三卷、釋名八卷などの著者、劉熙（隋書卷三二一三五經籍志）を中心に、左氏と尙書古今に通ずる折衷的な學者であつた士燮の庇護をえて、學界を形成していたこと、それが牟子にみえる經學と關係をもつていたことは、福井博士が「牟子の研究」に學界の事情、交趾太守士燮と學人、の二節を設けて詳論されているところである。<sup>(28)</sup> 隋書經籍志に

春秋經十三卷 吳衛將軍士燮注（一經部）

梁有士燮集五卷亡（四集部）

とあるのはその成果であろう。劉熙、程秉、許靖が、一流の學者であつたことも、著名であるが、この碩學を擁した學界は、建安年間の前半に、十年ほども續いたであろうか。

しかし、さきに述べたように、交趾も戦亂にまきこまれはしなかつたが、けつして平穩ではなかつた。劉表の壓迫に脅かされながら、張津が殺され、士燮もある程度劉表との妥協を余儀なくされた。すくなくとも交趾一郡が二十余年、すなわち董卓の亂（中平六年・一八九）から步騭赴任（建安十五年・二一〇）まで無事であつたとしたら、それは士燮の政治力である。建安九年（二〇四）の曹操の河南、河北の統一が天下三分の方向を導き、孫權の勢力が身に迫つてくると、劉表との妥協から、好んで孫權に媚附して行くのも、士燮の常套の政治的態度である。直前まで忠觀をはげんだ後漢室は、もうかえりみる必要もないのである。だから、建安十三年八月、劉表が死去し、孫權が劉備と結んで、冬十月、赤壁に曹操を破ると、士燮は、敏感にその壓力を感じ、あらたな提携を策したのであらう。流寓の士人にとつては、精神的には、平靜な地ではありえないのである。

その交州へ、劉巴が、曹操のために長沙、零陵、桂陽を収めようとして失敗し、遠適されてきた。劉巴の意見が、士燮と合うはずはない。早々に交州を去つて、牂牁道から益州にはいり、劉璋に投じたが、劉巴の交州滞在

はごくわずかのあいだのことと思われる。馬林の役は建安十三年の冬であり、十五年には步騭も着任しているからである。

つづいて許靖、許慈もとを追つたようである。許靖は、劉璋のもとで巴郡太守、廣漢太守、蜀郡太守を歴任したが、十六年には轉じて蜀郡にありというから、士燮との訣別は、十三年冬にもつとも近づくことになる。

この劉巴、許靖、許慈たちの轉出には、蜀志の三人の傳、その引用する零陵先賢傳、益州耆舊傳による注、それに劉璋の傳などによれば、つぎのような事情が考えられよう。

士燮も、いちどは許靖、袁徽たちと議をおなじくして、曹操に援助を請い、漢室から州への昇格を認められ、さらには七郡の董督を委ねられ、綏南中郎將に任命されていたのであつたが、ここで孫權との提携にでて、許靖たちと決裂するのである。劉巴は曹操に従つていたし、許靖はまず王朗を頼り、王朗が孫策に敗れて、交趾に落ちのびたのであるから、士燮が孫權と結ぶとその立場は失われる。たまたま益州牧劉璋とは、對劉表策をめぐつて交渉があつたことである。劉璋は闇弱、懦弱といわれて、

益州豪族の統率に苦慮し、江夏の出身のために、南陽の方面の名士をしきりに登用していたようであるから、<sup>(29)</sup>わかくして名を知られ、人倫臧否の稱のあつた汝南平興の許靖や、南陽の許慈は、劉璋としても、招聘したいところであつた。そこでまず劉巴を迎えた劉璋が、失意の許靖を勧誘し、ふたりの入蜀となつたものと思われる。

そのうち建安十六年(二一一)、劉璋は、荊州から劉備を迎え、十九年にはこれに降ることになつたので、許靖たちはそのまま劉備に屬して重臣となつた。劉巴のごときは、かつて零陵をめぐつて劉備の怒りをおかつていたが、諸葛亮と交通していたので、罪を謝して容れられた。この諸葛亮との交渉は、交州時代にも行われていたようである。<sup>(30)</sup>

中國の士人には、この派と別に、のちにそのまま吳に参加するひとたちがいる。程秉、薛綜の一派である。ふたりは、交趾に流寓して、孫氏の建業に協力できなかったし、まだ若くもあつた。また、吳の官僚の郷官では、彭城、廣陵、廬江、臨淮の淮水沿岸の四郡が、特に重要であつたが、これに屬さない汝南の程秉、沛郡の薛綜は、益州や蜀漢での許靖たちのようには重用されなかつた。

つた。むしろ薛綜は、當時の經驗を買われて、吳の領土となつた合浦、交趾の太守に任ぜられている。そのほかにも、士燮が孫權につくとともに吳の官僚となつた士人は多からうと思われる。

このような避難の士人は、當代第一流の學者としての漢文化の移入という業績を交趾にのこしたが、それよりもより士燮の理解ある保護による。士燮は、また、佛教を信仰し、牟子に影響をあたえたが、これも、福井博士の所論にくわしい。當時の交趾には、僧の康僧會がいたし、甘露元年(二五六)に、この地で、支疆梁接によつて、法華三昧經が譯出されるにいたり、士燮の外出の威儀や張津の焼香の態度などは、當時行われていた行像、もしくは行城を拜すがごときものであつたという。このような佛教の風習が劉熙の釋名に記録されたことにも、注目すべきであらう。

中國から一流の士人を迎えたことは、このように文化的に後漢末の思わぬ副産物であつた。そのいくにんかは、蜀に去つて重臣となつたが、三國の分立から吳の領有するところとなつた交州を、從來ほどには遠隔の地としなくなつて、つぎの時代に、さらに南の扶南などを開

發する據點としての基礎を築いていたのであつた。<sup>(32)</sup>

註

- (27) 葉德輝・劉熙事蹟考(觀古堂所著本第一集所收孟子劉熙注附)、三國志吳志卷八程秉傳、三國志蜀志卷一二許慈傳、三國志蜀志卷九劉巴傳、同注所引零陵賢傳を參照。
- (28) 前掲書・附錄・三七八―九頁。
- (29) 狩野直禎・前掲論文・二九頁。
- (30) この結果、劉備が交州に關心を深めた。章武元年(魏黃初二年・二二一)、李恢を交州刺史とした(三國志蜀志卷一三李恢傳)のも、建興三年(二二五)の諸葛亮の南征も、許靖、劉巴、賴恭などの意見にもとづくところが大きいことであろう(宮川尙志・前掲論文・七三頁)。もつともこのとき、士燮は、すでに孫權治下の一太守にすぎない。
- (31) 宮川尙志・三國吳の政治と制度(六朝史研究所收・二二九九―二四一頁)。
- (32) 杉本直治郎・三國時代における吳の對南策(東洋の政治經濟・昭和二四年―東南アジア史研究一所收)。

六

以上、後漢の交趾刺史に關する諸問題を中心に、遂に孫權の版圖に歸するまでの、士燮と、士燮をめぐる諸勢力の動向を述べてきた。士燮は、こののち士燮傳にみら

れるように子の廩を質に送り、雍闓など雲南方面の土豪を誘致し、豪華な奉貢を續けるなど、孫權への服從に懸命となるが、これも、士燮の病死とともにその關係がくずれて、士氏がもろくも壊滅した事實を考えあわせれば理解されるであろう。

後漢の交趾統治は、その惡吏のために常に土民の反亂を呼んだが、士燮の交趾太守としての武力は、その土着勢力を逆に統合したものであつた。したがつて、百蠻を震服させることはできて、中國の群雄に對しては、劉表に蒼梧を侵されたように、交趾一州を守護できるものではなかつた。士燮の刺史に對する、土民に對する、また群雄に對する態度が、この勢力關係から打ちだされていることはいうまでもない。

後漢の交趾(部)と交州、そして交趾牧、交趾刺史、交州牧という制度の問題も、些細ではあるが、そこに、後漢の政治情勢と交趾の地位が窺われ、晉代の著者の誤りも、それに、孫策の交州刺史、劉表の(交州)刺史、三國時代の吳、蜀、それに晉の交州刺史が存在した混亂を示すものである。そして、そこに、士燮をめぐる諸勢力の動向が眺められるのである。